幸せとは

イギリスより一時帰国の孫娘、初めてのアルバイト。百貨店地下歳末売り場。当然ながらの数々の失敗。―今日ね、お客さんにごまめはどこ？　と聞かれたの。「ハァ、豆ですか。豆は向こうです」。あきれた顔でよその方へ行っちゃったの。

失敗の極めつけは、みょうばんの売り場を聞かれた時。「ハァ、明礬温泉ですか。出口を出られたらすぐバス停です」。プイッとその人行ってしまったの。

わが失敗を他人ごとのようにアッケラカンと身ぶりまじえて再現する孫。ものを知らなすぎると非難されて当然である。だが、失敗にくよくよしないある頼もしさを感ぜしめる。それも私だけの孫びいきのせいかもしれない。

「外人が来たらお前の出番だね」。「来たわ。それが、向こうは日本語ぺらぺら」。どうにか期間を終了。改めて紳士服売り場をすすめられると、「スケジュールを見なければ」とかっこうをつける。初めからスケジュールは何もない。

その夜、私たちに小さな包みに手紙をそえて。「初めて働いて買った物です。心し

て使って下さい、お金を稼ぐことはとても大変なことですね…。ディア、おじいちゃん、おばあちゃん」。

二個の湯飲み。そのおばあちゃんうつむいたまま。泣いている。私は焼きの色に見入りながらも、亡き恩師下村湖人の言葉を心に聞いていた。「わが家族が倖せと思う時は、ひとの不幸と比べている悪魔の喜びと隣合わせだよ」と。

（一九九三年二月十三日）